■千葉東洋医学シンポジウム25周年記念記録集刊行に寄せて

発足当時をかえりみて

富山医科薬科大学名誉教授　熊谷　朗

千葉東洋医学シンポジウムも25周年を迎えられることをおよろこび申し上げます。

小生は1971(昭和46)年2月千葉大学第二内科の教授として大阪より千葉にまいりましたので，その2年後に千葉東洋医学シンポジウムが発足したことになります。

その時代をご存知の方はおわかりのように，学園紛争の名残りが千葉大学の医学部でも残っており，そのため色々なところに影響があり，私が赴任した第二内科も例外ではなく，研究室は全く動いておらず，これが大学の研究室かと思ったほど，荒れに荒れていました。当時のことは今でも口外することを避けていたほどひどい状態でした。

紛争は阪大で体験ずみのはずの小生も，教授会が終わって会議室を出たところで，どこの学生か不明の人たちに取り囲まれたりもしました。

このような時代でしたので，影響を受けたのは教授だけではなく，学生も同様であったと思います。千葉大学東洋医学研究会五十周年史をみますと，学生のクラブ活動が著しく抑制されていたようです。

小生は内科教授でしたので，学生クラブ活動としての東洋医学研究会の学生の熱意に感動し，またこれを指導されている先輩諸氏の努力に動かされ，卒前教育として東洋医学を選んだ学生のために何か出来ないかと考えていました。

しかし目の前にあるわが第二内科の復興への努力で手が一杯でしたが，年に1回ぐらいは現代医学と東洋医学の「学」として対比に立っての私の私見などを述べておりました。

その背景にはすでに大阪での私の研究活動の一つとして，生薬甘草中の有効成分グリチルリチンの科学的研究も実っておりましたし，わが師の山村雄一先生らと共に和漢薬シンポジウム(現在の和漢医薬学会)も，富山の人たちと一緒にすでに1967(昭和42)年より開催しておったいきさつもあり，何とか学生活動の活性化に応えたいと思っておりました。

そのような千葉大学医学部での背景の中で，千葉東洋医学シンポジウム案が実って，当時会長をしておられた眼科の鈴木宣民教授などと話し合って，当時窓口の役割をしていただいた外科の山下泰徳先生らの努力によって，このシンポジウム開催の運びとなりました。つまり，当時までクラブ活動であった千葉大学東洋医学研究会の学内活動が制限され(学内の眼科の研究室の使用など)た代わりに，毎年医学部の教授である会長が主催する東洋医学シンポジウムを年1回行い，これを学生の部員が手伝うという形となったわけです。もちろん部活動としての自由講座や，大学祭などは引き続き行われていました。また，部活動の学生用の漢方外来も，藤平先生らの努力でポリクリまがいのことを第二内科でお手伝いし，当時山本昌弘講師らがお世話していたが，カルテ，投薬など医療上の問題が出てきて，新病院になった頃には，この方面は従来通りにはゆかなくなってきた。

小生が富山医科薬科大学に移るまでは，今回のプログラムを見ますと9回あたりまでシンポジウムの手伝いをしたと思います。この間東洋医学と西洋医学の接点を求め，全国より講師をお呼びして意見を交換し，成果も上がっておったと考えております。

私が富山に移ってからは，「和漢薬シンポジウム」が17回を最後に，発展して「和漢医薬学会」に成長し，今年で十五周年を迎えています。現在富山では，寺沢捷年教授が和漢診療講座の主任として活躍されています。

千葉東洋医学シンポジウム「25周年記念記録集」の原稿依頼があり，発足当時の内部事情の要点を書きました。編集者の松下，鎌田両先生のご努力に敬意をはらうと共に今後のご発展を祈ります。

(1998. 10. 25)